

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



子どもといっしょに水を運ぶOFS (東京ディズニーランド労組) ワーキングツアーの参加者

Contents

| | |
|---------------------|-----|
| ●第7回会員総会のお知らせ | P 2 |
| 春のワーキングツアー報告 | P 4 |
| <新連載>黄土高原史話 | P 7 |

2001.5

79

GEN第7回会員総会とシンポジウムのご案内

緑の地球ネットワークが1999年に準備会を発足してから、今年で10年目をむかえました。これまでに中国山西省大同市で植えてきた木は1,190万本、面積は3,570haになりました。

今年から来年にかけて記念イベントも計画中ですが、まずは第7回会員総会があります。シンポジウムとあわせてつぎの日程で開催しますので、どうぞご参加ください。会員以外の方でもご参加いただけますので、お気軽にど

うぞ。会員の方には、あらためてご案内をお送りします。

●日時：6月16日（土）13時30分～16時30分

●場所：大阪市立弁天町市民学習センター（JR環状線、地下鉄中央線「弁天町」駅すぐ）

【シンポジウム】13時30分～15時20分
『黄土高原緑化協力の現場から』

最初は苗木代だけの協力にはじまって大同での緑化協力は、さまざまな困

難にぶつかりながらも、たくさんの方の力を集めて質・量ともにひろがりながら現在にいたっています。これまでこの緑化協力にかかわってこられた方がたと、これまでの総括とともに今後の方向を語り合いたいと思います。

【第7回会員総会】15時30分～16時30分

※終了後、懇親会（会費3,100円）を予定しています。参加申し込みは6月14日までにGEN事務所まで。

写真展『中国黄土高原』成功

ボランティア・ご来場ありがとうございました

橋本紘二さんがGENの緑化協力地大同で5年間撮りためてきたなかからよりすぐられた作品約70点が、4月1日から8日までJR京都駅インフォメーションプラザで展示されました。

駅ビルの2階、メイン通路の一画という絶好の立地で、1日3000～5000人、期間を通じて3万人をこえる入場者がありました。はじめて橋本さんの写真を見て、すっかり気に入って写真集を買ってくれた人や、期間中毎日のように会場を訪れる人がいたり、また、場所柄、欧米やアジアの人も多く、じつくりと写真に見入っていました。

また、会場のカンパ箱には、8日間で118,38円が集まりました。黄土高原緑化につかわせていただきます。

多かったのは、「これはいつの写真ですか」という質問で、「いまの中国の農村のすがたです」と答えると、いちように「昔の写真かと思った」と言われます。ウシやロバがひく木製の農機具やカゴに入った種を人が蒔く姿を見れば、無理もありません。

5日にはちょうど訪日中だった中国国家環境保護総局の解振華局長が立ち寄られました。移動の途中で短い時間でしたが、熱心に見ておられました。

ワーキングツアーのシーズンで、事務所も人手が足りず、会報やインター

ネットで呼びかけた結果、たくさんのボランティアに参加していただき、無事写真展を終えることができました。お手伝いいただいたみなさん、ご来場いただいたみなさん、どうもありがとうございました。

* * * * *

GEN事務所では橋本紘二さんの写真集・絵はがきを販売しています。ご希望の方は電話・FAX・e-mailご注文ください。

写真集『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』A4判変型 208ページ 定価6,000円（※GENにご注文いただければ、送料はGENが負担して6,000円でおわけします）

★ご自分で購入されない場合でも、学校や地域の図書館に購入願いを差しただけで、より多くの人目にふれることにもつながります。よろしく願いいたします。

絵はがき『中国黄土高原』（4種類。各カラー8枚組）

◎『春』『夏』『秋・冬』『緑化』
.....1セット500円（『秋・冬』『緑化』を値下げしました！）

※送料別途

★この写真集と絵はがきの販売によってえられた収益の一部は黄土高原の緑化につかわれます。

ご寄付・助成金

全国都市下水道対策連絡協議会より、1999年11月の大同県・陽高県の地震で被災した小学校の再建に70万円の寄付をいただき、4月の同会ツアーで現地を訪問した際に手渡されました。

経団連自然保護基金より、今年度140万円の助成金を決定いただきました。うち40万円は株式会社リコーからの寄付金です。

国際開発救援財団より、今年度252万6千円の助成金を決定いただきました。

使用済みテレカ回収 協力ありがとうございます

使用済みテレフォンカードは2000年4月から1年間で1万5千枚を提供していただき、換金して29万6千円となりました。1枚あたり約2.5円でした。未使用のカードを提供してくださった方もあり換金して28,650円になりました。学校や組合などのグループや個人で集めていただき、ありがとうございます。黄土高原の緑化活動に使わせていただきます。今後ともよろしく願いいたします。



“カササギの森”にご参加ください!



水の流れる谷筋にはポプラが自生している

昨年秋からはじめた“カササギの森”は、作業道や貯水槽、管理小屋などの基盤整備はほぼ完成し、今年春のツアーで起工式と植樹をするなど、本格的にうごきははじめました。

マツ、果樹、灌木類を植えていく以外に、従来はできなかった造林方法をためしたり、霊丘自然植物園で育てた苗や北京から導入した品種を栽培するなど、パイロット林場的な役割も期待されています。また、“カササギの森”のある大同県聚楽郷は交通の便利ところで、日本からのワーキングツアー

だけでなく、中国各地からのボランティアを受け入れることもできます。

1haあたり5万円(苗木代、労賃、5年間の管理費などの諸経費をふくむ)の協力資金で、一般の参加を募っています。現在までに、40個人/団体から、48h分のご協力をいただいています。結婚、誕生、入学、就職などの記念に、また、ご家族や友人どうしでなど、みなさんのご参加をお待ちしています。

【“カササギの森” 協力方法】

・1口5万円で、何口でもけっこうです。“カササギの森”と明記して下記の口座あてにお送りください。

郵便振替 00940-2-128465

加入者名 緑の地球ネットワーク

【“カササギの森”に参加すると】

- ・記念のため現地に協力者の氏名を書き入れます。
- ・協力者証をお送りします。
- ・成育状況を5年間写真で報告します。

物品回収にご協力を!

●使用済みテレホンカード

キズや汚れ、折れ目のないテレカを回収しています。裏表をそろえ、輪ゴムでまとめるなどしてお送りください。テレカ以外は対象外です。

●未使用のテレホンカード

ご家庭で眠っている未使用のテレカがあればお送りください。

●書き損じハガキ

書きまちがえた年賀状や暑中見舞いなどが引き出しの奥に眠っていませんか。古いものでもけっこうです。使用済み切手は対象外です。

●商品券

半端に残ったり、使うあてのない商品券があれば、お送りください。

●未使用の文具

大同の学校へのおみやげにします。未使用の新品にかぎります。

GEN創立10周年記念シンポジウム

黄土高原草の根緑化協力の10年とこれから

GENが中国山西省大同市の黄土高原で緑化協力を開始してから、今年で10年目をむかえています。これまでにあったさまざまな困難や、それらをどう乗り越えてきたか、現時点での問題点やこれからのすすめかたなど、いろいろなことを話し合いたいと思います。ぜひご参加ください。

また、関東方面でチラシ配布に協力して下さる方を募っています。必要部数をお送りしますので、GEN事務所までご連絡ください。

GEN創立10周年記念シンポジウム

【黄土高原草の根緑化協力の10年とこれから】

- 日時：6月8日(金) 18時30分～20時30分
- 場所：木のアトリウム(関東森林管理局東京分局。地下鉄東西線「木場」駅または「東陽町」駅下車10分)

●パネリスト

- 鈴木和夫(東大大学院教授)
- 遠田 宏(元東北大学附属植物園長、GEN顧問)
- 高見邦雄(GEN事務局長)

●コーディネーター

上田 信(立教大学教授、GEN世話人)

●参加費：500円

★終了後、懇親会があります。会費は3,000円。6月5日までにGEN事務所までお申し込みください。

2001 夏の黄土高原ワーキングツアー

今年の夏は、大同市北部の新栄区と、大同県を中心にまわる予定です。内蒙古自治区に接する万里の長城をみたり、カササギの森で植樹したり、もちろん村の人たちとの交流もあります。

締切日より前に定員になることが多いので、参加後希望の方は、お早めにGEN事務所までご連絡ください。

- 日程：7月26日(木)～8月2日(木)

●費用：一般=20万円、学生=19万円(国際航空運賃、中国国内での交通費/食費/宿泊費、ビザ取得手数料、GEN年会費ふくむ)※中国国際航空利用 ※関西国際空港発着 ※成田空港発着の場合は14,000円(航空運賃の差額)高くなります。

●定員：30人(先着順)

●締切り：6月26日(ただし定員に達し次第締め切ります)

2001 春の黄土高原ワーキングツアー報告

今春は全部で5つの団が大同を訪れました。GENのワーキングツアー（総勢38名）が、3月25日から4月1日まで。さらに4月6日から11日まで全ジャスコ労組、8日から14日まで全国都市下水協、15日から20日までOFS（東京ディズニーランド労組）、20日から27日まで東北電力総連とつづき、すべて無事終了しました。

GENのツアー日誌の抜粋と、全ジャスコ労組、全国都市下水協、OFSのレポートをご紹介します。

「カササギの森」10年後を夢みて……

GENワーキングツアー日誌から

【3月25日（日）】

●夜行列車。ホームの上から石炭のにおいが漂ってきます。「世界の車窓から」の風景ですね。1室に4人のベッドがあって、ガタンゴトン揺られて大同に向かいます。

室内でほのかににおう石炭の中、今日は寝ることにします。また明日もがんばりましょう。おやすみなさい。（役正好）

【3月26日（月）】

●天気予報では最低気温マイナス10度、最高気温2度とのこと。ギョッとして毛のモモヒキを引き出し、キルティングのジャンパーを着こんでツアーのむかえに大同駅にむかう。この季節寒暖の差のはげしいことは百も承知しているながら、昨日までの暖かさ、セーター1枚の生活とは天と地、耳までピリピリしながらホームで待つうちにディーゼル機関車に引かれた列車が無事到着する（電化されていないながら何故ディーゼルなのか不思議に思う）。（遠田宏）

●最後に、何年もかけて植林している

土地を見ました。

“木は緑色”という観念があったため、最初は“どこに木があるの？”なんて思ったけれど（自分でもおどろきました）よく見ると、本当にたくさんの木がうわっているのに気付き、とてもおどろき、感動しました。

人びとの地道な努力で砂漠化しそだった土地にこんなにたくさんの生命が植えられ、一生懸命木もがんばって根づこうとしていました。（近藤春菜）

【3月27日（火）】

●歴史のみならず、現在のきわめて貧しい中国の状況も、真実をありのままに受けとめることはもちろんだが、何か動きださなければ変わらないのも事実だ。戦争がいかに間違っただろうと、生きのびるために、あるいは強制的にすべての民族の間で起こり続けてきた歴史を私たちはもう知っている。その一つひとつを忘れるはずがない人びとがどこにでもいる。それを重くかみしめるという前提の下で、やはり私たちは失敗を繰り返しながらでも1歩

ずつ前に進んでいかなければならない。木々のように、ゆっくりと、でも確実に。（相馬孝洋）

【3月28日（水）】

●黄土高原の畑と家、切り立った崖を見て、そこで生きている人たちのことを考えた。

高見さんが言うには、農村の人たちは冬は1日多くて2食、

あとは寝ているだけだそうだ。貧しいんだな、と思う。

一昨年の夏、タイ山岳民族の村を訪れた時は、そこまで貧しいとは思わなかった。畑は人口圧で山の頂上まであり、売春のことや麻薬、ここの子どもたちと同じように寮に寄宿していたりするが、食うものがない、とは見えなかった。

自分とこの人たちの違いは？と思うと、生まれた場所と育った環境が違うだけで、そう思うとやり切れなくなってくる。（横田真彦）

●最近よく思うことは、見えないものをよみとる力がほしいなあと思います。植林をするにしても、何日も前から私たちのために準備をしてくださっているのであろうし、植林というのはほんの一部の作業であって、保持していくにはものすごく労力があるとききます。村での昼食にしても1日前に食材を運んできて、普段食べない肉や野菜を食べさせてもらっています。普段の村の人たちはじゃがいも、あわを食べているときいても今いち想像できません。その他、季節によって条件が変わるでしょうし、気候や地形、時代背景、政治、経済etc.ももっともっとthink globally act locally!! したいと思います。（工藤崇）

●果樹園でクルミの苗木約80本を9時30分～11時50分にわたり作業をする。

われわれ日本人だけではなく、村人および子どもたちも参加しての作業には心のあたたまる思いがする。特に子どもたちの熱意には日本人として大いに学ぶところがあった。（松岡正）

●その後、リンゴ園を見学。高さ2～2.5mと、立派に育っている。

午後おそく、小学校を訪問。子どもらと、ハンカチ落としゲーム。

学生たち10名ほどが、人形劇を演ず



霊丘県上北泉村の小学校附属果樹園でクルミの木を植える



鳴り物入りのにぎやかな歓迎をうける

る。2才ほどの男の子がトコトコ出てきて、人形を持っていこうとするアクシデント。一同、大笑い！（谷口義介）

【3月29日（木）】

●今日のカササギの森でのにぎやかで楽しい歓迎に、私がこの恩恵にあずかって良いのだろうか？ と思う。

凍った土を掘って、砂を少しかたよせて入れ、モンゴル松を植えました。子どもたちが洗面器で大事に水を運んでくれました。どこでも子どもたちは一生懸命働いて、とてもいい笑顔です。（藤井恵子）

【3月31日（土）】

●私は今年の夏に続いての2回目の参

加ですが、夏とことなっていて「茶色の世界」であるところに黄土高原の本当の姿を見たような気がします。

しかし、大同市の黄土高原の緑化について、その行程は超長期間を要するものですが、希望の1歩が確実に踏みだされたということを感じました。

それはもちろん、明確な根拠のあるものではありませんが、3月26日に見学した鍋帽山地球環境林のヤマナラシとアブラマツの混交林で感じた、「これは山（森林）になる」という直感、植物園の様子、過去に地元で植栽されたカラマツ林に侵入しているシラカンバを見て感じる自然の回復力、上北泉村の果樹園などを見てのものでした。

また、3月29日に見た「カササギの森」予定地。ここに私たちの夢をえがくことができるようになったことも大きな喜びでした。眼をつぶり、ここに若々しい森林が成立した姿を想像し、10年後にその片りんでもいから見てみたいと感じました。（棟方鋼男）

【4月1日（日）】

●このツアーに参加することは私にとって相当の覚悟を要しました。でも、現代中国の現状をどうしても自分の目で見ておきたかったので、思い切って参加させていただきました。

「こういうツアーに参加する日本人とは一体どういう方々なのだろう？」とか「噂の高見さんを生で拝見したい！」などなど、ツアー直前の私はこのようなずれた視点の好奇心でいっぱいでした。

結論から言うと、行ってよかったですと思っています。帰国後、会社でひんしゅくを買っても、猛烈に忙しくても、高熱で倒れてもその気持ちは変わりませんでした。些細なことに腹が立って、何度も心にグサグサ刺さったけれど、この年齢で今の時期に行けてよかったなあ、と思っています。（勝部美帆）

山西省の地図を見ながら思うこと

大久保 裕子（全ジャスコ労働組合高槻分会）



“カササギの森（喜鵲林）”で記念撮影

ワーキングツアーから約3週間が過ぎた。私のなかでいままであまり関心のなかった中国が、日ごとに大きな存在になっていく。たった6日間のツアーではあったが、私にとっては珠玉の時間となった。

私たちの団はどこへ行っても暖かく

迎えていただいた。しかし、これは私たちに對してというよりは、これまで緑化活動を続けてこられた高見事務局長をはじめとしたGENのみなさんへ向けられた感謝だと思う。これまでの地道な活動、そしてそれに自分が関わったということを考え、胸が熱くなった。

私なりに今回の活動から得たもの、そしてこれからどうしていくかを考えてみた。

あふれてくる思いはいろいろある。そのなかで、私が体験したことを素直に、周りの人たちに語り続けようと思う。私が全ジャスコ労働組合のメンバーとしてこのツアーに参加したきっか

けも、5年間友人から体験を聞かされ続けたということが、一番の理由であるから。たといえますぐ伝わらなくても、いつか心に響いてゆく時があると信じている。

そして、私自身は当たり前と思っている生活がどれほど恵まれているかを忘れず、ものにあふれた生活をいましめ、水1滴、紙1枚、木1本の大切さを忘れない生き方をしようと思う。

いま、私の部屋には、大同の書店で手に入れた、山西省の地図が貼ってある。朝起きて、この地図を見るたび、厳しい環境の下で生きている人たちや、緑化活動を続けている人たちを思い、来年の春、再び黄土高原の土を踏みたくいと強く願っている。

そして、「逃げ遅れていまもこれをやっています」という高見氏のお話をもっともっと聞くことができれば幸福だと思う。

植樹と水の再利用は共通の課題

新田 裕正（全国都市下水道対策連絡協議会・大阪市従）

私たち全国都市下水道対策連絡協議会（略称・都市下水協）は、今年結成30周年を迎え記念事業の取り組みとして今回初めて黄土高原ワーキングツアーに参加しました。2年ほど前から使用済みテレカの回収協力に取り組んでいましたが、まさかその苗木を自分た

ちの手で植樹するとは思っていませんでした。

私個人は、昨年事前調査として全ジャスコ労働組合さんのツアーに参加させていただき植樹体験をしているので少し余裕を持って訪れたわけですが...

夜行列車で早朝大同に到着、私たち

を出迎えてくれるはずの黄色の大地があたり一面真っ白な世界！参加者全員防寒対策。しかし、この雪も農家の方たちにとっては貴重な水資源になると聞き、深刻な水不足であることを実感しました。行程は初日のみ変更がありました。2日以降は予定通り順調に



地球環境林センター入口にて。雪の中の記念撮影

作業・交流をはかることができました。また、目的の一つであり各単組から寄せられたカンパ金を1999年の地震で大きな被害を受けた小学校建設への支援金として送り届けることとその村の子供たちとも交流（遊んでもらった）ができ当初の目的も果たせたと思っています。さらに、行程が進むなか、参加者個々がそれぞれに考え組織として行動してるだけではなく、個人としてワーキングツアーに取り組んでいる姿も垣間見ることもできました。今回のワーキングツアーで感じたさまざまな想い、体験を今後の運動に活かすとともに、この取り組みをいかに継続していくべきか自分なりの宿題もできました。答えは簡単には見つからないかも知れませんが何らかのかたちでこれ以降も協力を続けていきたいと考えています。最後に、ワーキングツアーを取り組まれている各労働組合のみなさん、また一般参加されてるみなさん、ともに手をつないでがんばりましょう。

できることから始めよう！

遠藤 義晴（OFSエグゼクティブ）

北京から夜行列車で6時間、大都会？から農村へ、黄土一色の荒涼たる大地、そこで暮らす人びと、訪れる先ざきで、出会い、ふれあい、別れを4月15日から20日までの6日で体験した。

「素敵な宇宙船地球号」の番組で観た苑西庄村を訪れた。3年前まで1日バケツ100杯程度で村人たちと家畜が生活していた。バケツ4杯分で1家族が生活するなんて、私たち日本では想像もつかない環境である。この村に緑の地球ネットワークの協力で1本の井戸を掘ったことで、現在は豊富な水を確保し、生活が改善されつつある。水が生活を変えること、生活を豊かにできることを目の当たりにした。

また、小学校附属果樹園の建設のお手伝いをした。子供といっしょに水を運び、1本のアズノの苗を植える。村人たちとの共同作業だ。この子供たちが、村がもっと豊かになるように願

ながら.....。今後のアズノの木と子供たちの成長が気になる。またこの地を訪れたい。

ホームステイした楊窰村では、生活物資の少なさ（＝不便さ）を覚える反面、活発な子供たち、幸せそうな家族、そしてたくさんのおもてなしを受け、中国農村部の生活文化を体験した。

私は日本の「物の豊かさ」「贅沢な生活環境」を改めて確認した。水がある贅沢さ、緑の恵みを。帰国後、湯をいっぱい溜めた風呂に浸かり、そう実感した。

今回で2回目となる自己啓発（＝気づき）の旅、各々が感じたことは異なるが、参加した24名は、大切な何かを手にいれたに違いな

い。これからの人生で、仕事でおおいに役立つと思う。このツアーで得たものが大きく整理がつかない状況だが、「できることから始めよう！」のかけ声で、一つひとつ行動したいと思う。まずは、見て、体験したことを多くの人へ伝えたい。

最後に、このツアー実現のため、緑の地球ネットワークの高見さん、緑色地球ネットワークの武さんをはじめ、ご協力いただいた多くの方々に感謝したい。



子どもたちと一緒に植えた苗木に水をかける

植物を育てる (11)



立花 吉茂 (GEN代表・花園大学客員教授)

●野生植物を育てる

野生植物は性質が強いから育てやすいだろうと考える人がいるだろうが、実際は反対で、野生植物を育てるのは大変むずかしいのである。日本一の栽培の大家といわれていた玉利幸次郎先生が生前、「春と秋の七草を種子から育てることができたら、わたしは坊主になってもいいよ」と若い私に言われてびっくりしたことがある。なにもしなかった私は「しんまいだと思ってなんたることをおっしゃる」と内心おだやかでなかったが、やってみると、まず第一に種子を取るのが大変で、第二番目に種子が発芽しないこと、第三に成長が不揃いで栽培植物のようにはそろって育たず、花もいつ咲かわからないほど不揃いだった。普通に育ったのは栽培植物になってしまったスズナ、スズシロだけであった。このことは雑草や樹木のみならず、庭木の仲間

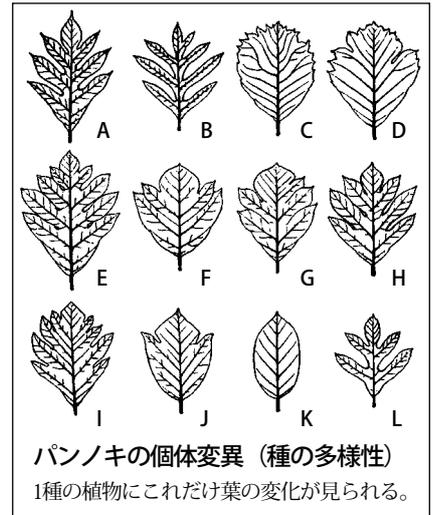
や果樹でさえ、種子発芽に成功するには豊富な経験と基礎知識が必要である。このように不揃いになるのは、野生植物には「種の多様性」があるからで、栽培植物は育てやすい遺伝子だけが選抜されていて、多様性がない。生物は進化の過程で、環境の変化に耐えて生き残れるように遺伝的に多様な個体を含んでいるのである。

●種子を取るには

自然の復元や緑化のために野生植物を増やそうとすれば、種子を集める勉強から始めねばならない。「熟した種子を拾ってくればよい」というような簡単なものではない。野生植物の種子が熟するのは個体ごとに違うから、長期間が必要である。たまたま熟した1本の木からだけ種子を取るはその種(しゅ)の多様性を無視したことになる。したがって、可能なかぎり多くの分布地、多くの個体から種子を集めな

ければならない。種子が発芽したとき、何%生えたか記録せねばならない。それは、特殊な種子だけが発芽しては1本の木からだけ種子を取ったのと同じだからである。植物園で植物の戸籍を重視するのはこのためである。

自然を保存するには多くの人びとの努力が必要だが、自然の再現、復活にはさらにいろいろのことを勉強せねばならず、しかもそれが根気よく実行され継続しつづけなければならないのである。



黄土高原史話 <1>

環境林センターは漢代の遺跡

谷口 義介 (摂南大学教授)

地球環境林センターは、大同市の中心から少し離れた南西郊外にあり、面積20ha。さまざまな施設をそなえ、GENの黄土高原緑化協力の基地的役割を果たしています。ワーキングツアーでも必ず訪れる場所で、そこでの作業はいわば必修科目。

しかし内職に精出す生徒はどこにもいるもので、99年夏のツアーで来た○○大学の△△教授は、もっぱらコオロギを追いかけるのに熱中。同氏の専門は、そもそも植物学にあらず、動物(昆虫) だったので。

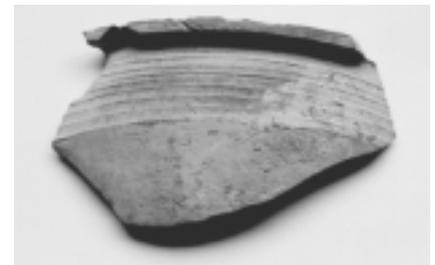
2000年の夏、再訪した私に、GEN顧問の遠田宏先生が声をかけました。「あちらの畑に土器らしいものがたくさんころがっているが、ちょっと見に行きませんか。」

センターの南西にある広葉樹育苗区

に行ってみると、おびたしい土器片が散布しています。さいわいこの日の作業は、ちょうどこの畑の草取り。同行のみなさんにも、こっそり頼んで拾ってもらいました。

集めた土器片は、色調・文様、胎土・焼成からして、明らかに漢代の無釉の灰陶で、器種は深鉢(写真)・壺・甕・高坏・蒸し器と瓦類など。畑の下には、どうやら漢代の遺跡が眠っているようです。

同夜、歓送会の席上、大同市青年連合会の祁学峰主席に、「センターは漢代の貴重な遺跡ですよ」と話しますと、傍で聞いていたGENの高見邦雄事務局長、あわてて「大したことはない、大したことはない」とさえぎります。畑を掘り返して調査でもされたら大変、と思ったのでしょうか。



帰国して文献を見たら、大同市の東北数キロには秦・漢時代、平城県がおかれ、そこは前漢では雁門郡の東部都尉の駐在地でした(『漢書』地理志)。北方の遊牧民族・匈奴に対する前線基地のひとつです。

いまの大同市の都心をはさんで、この平城県のちょうど反対側に位置しますが、センターには同じ時代の遺跡が埋もれているわけです。

今年(01年)春のツアーで、同じ場所に松の苗を植える作業中、また内職をしてしまいました。

「やはり掘ってみたいな、この遺跡。」



第18回森林の市

豊かな森林の恵みに感謝

- 日時：5月26日（土）、27日（日）
- 場所：東京都立代々木公園B地区
（NHKホール隣）
- 入場無料
- 主催：林野庁・森林の市実行委員会
- 内容
 - ・木製品・山菜・植木などの展示販売
 - ・木工教室、木工品の製作実演など
 - ・森林造成・水と人との関わりのパネル展示

農林漁業信用基金のテントで、橋本紘二さんの写真パネルを展示します。ぜひ、お立ち寄りください。

土佐小夏をどうぞ

今年も小夏の季節がやってきました。初夏の味覚をお楽しみください。

◎小夏（低農薬有機栽培）

M 5kg 3,500円

L 5kg 3,800円

※送料別途。関西630円、関東840円（20kgまで）。

※出荷は5月下旬まで。

●お申し込みは田中隆一さんまで

〒781-7412高知県安芸郡東洋町甲浦

TEL/FAX. 0887-29-2500

e-mail: r-kei@md.newweb.ne.jp

※売上げの一部をGENにご寄付いた

だいているので、ご注文の際は「GENの紹介」とひとこと添えてください。

編集後記

考古学がご専門の谷口先生に、3~4回の予定で連載をはじめいただきました。ご感想をお聞かせください。

ツバメが電線に止まってごきげんでさえずっていたり、親と同じぐらいの大きさに育ったスズメの雛が大声で親にえさをねだっていたりするのを見るとなんだか嬉しくなります。

環境破壊や地球温暖化で生態系のリズムが狂いかけているいま、こうしたなにげない自然のいとなみに季節を感じることがいつまでできるのか、不安でもあるのですが.....。（東川）